

明石の史跡（97）シーボルトの真意



文政9年（1826）1月9日（太陰暦）、江戸に向かうために、出島の商館長に従って、長崎を出発したシーボルトは、2月2日、午後9時に加古川に到着。

翌3日、午前6時に加古川を出発。途中、土山村の近くで景色を楽しみ、午後には明石に到着している。以下は、明石に関するシーボルトの叙述である。

二時ころ明石につく。かなり大きい町で、藩主松平左兵衛督（Matsudaira Sakioje-no-ske）の城下である。その他の点でも秩序や規律の見られない取るに足りない土地である。われわれは海岸に沿って旅をつづけ、前方南南西に淡路島を見る。島と本土との間の海峡は日本の一里（約四キロ）の幅で、航行に適する充分の深さがあるとみえて、日本の船がほうぼうに行き交うのが見えた。舞子の浜で素敵な海の景色にみとれ、その近くで航海用のコンパスによって若干の観測を行なった。（シーボルト著『江戸参府紀行』〔東洋文庫〕151頁）

注目したいのは、明石という城下町にたいして、彼は、「秩序や規律の見られない取るに足りない土地である」といいきっていることである。

姫路・曾根・高砂・加古川といった地域に関しては、彼は、医師であり、博物学者らしい鋭い観察眼でもって、叙述が進められているだけに、なぜ明石は、「取るに足りない土地」なのか。

この前年（文政8年）の2月、幕府は、異国船打払令を発令。我が国の沿海に接近する外国船には、無差別砲撃を命じたもので、無二念打払令ともいわれる（『国史大辞典』1. 485頁）。海峡の町明石としては、何らかの対応を強いられていたのではなかろうか。明石の町を通過して、舞子の浜で、「素敵な海の景色にみとれ」ていたシーボルトの真意は、なんであつたらうか。われわれの課題でもある。